

M・N・ピアスン著 生田滋譯
ポルトガルとインド

——中世グジャラートの商人と支配者——

近 藤 治

「カンバヤは二本の腕をのばし、右手でアデンを握り、一方の手でマラカを握っている」とは、十六世紀初頭のポルトガル人トメ・ピレスの『東方諸國記』にあることばである。カンバヤは當時グジャラート王國の中心的港市カンベイのこと。グジャラート商人が西方では紅海入口のアデン、東方では東南アジアのマラッカをそれぞれ據點にして東西貿易に幅廣く活躍していたことを、このことばは象徴的に述べたものにはならない。

たしかにグジャラート人は、インド亜大陸の人々のなかで古來最も海上貿易に活動的な人々であった。一方ポルトガル人は周知のようにヨーロッパ諸國の先頭を切つて東方貿易に乗り出した、いわゆる大航海時代の旗手である。この兩者の邂逅と對決、拮抗と消長は考えてみただけでも興味の湧いてくるテーマである。本書はこの問題に對して、グジャラートの側の對應に視點を置いて検討したものである。原題は *Merchants and Rulers in Gujarat, the response to the Portuguese in the sixteenth century* (Berkeley-Los Angeles: University of California Press, 1976)。著者マイクル・ネイラー・ピアスン(M. N. Pearson)は一九四一年ニュージールランドに生れ、アメリカのミシガン大學で博士號を取得したインド史家で、現在はオーストラリアのニューサウスウェールズ大學史

學科助教授である。また譯者生田滋氏は冒頭に引用した『東方諸國記』の共譯者としても著名な東洋史家である。

さて本書は序文と六章からなる本文、それに文獻解題から成り立っており、新たに譯者の解説も附されている。以下本文についてその特徴的な内容を紹介していくことにしよう。

まず序文に當る「はじめに」のところで、著者は本書全體の基本的な構圖を次のように描いている。ポルトガルは十六世紀のほとんどの間カンベイ灣を起點とする海上貿易の大部分を支配するに至り、彼らの貿易支配制度を打ちたてることに成功した。その成功の鍵は、グジャラート社會において支配者と商人との政治的關係が缺如していたことにあった。商人の活動に重大な關心を示さなかつた支配者は、ポルトガルの貿易支配制度をやめさせようとして積極的な行動をとることはなかつたのである。本書が對象とする一五〇〇年から一六五〇年に至る一五〇年の間のちょうど中間の時期に當る一五七二―七三年に、グジャラート王國はムガル朝に併合されてしまふが、右のような支配者と商人との關係、廣くは支配者と社會諸集團との關係には重大な變化が起つていず、このような觀點からするならばムガル朝のグジャラート征服は重要問題ではない。またポルトガルのあとになって來航したイギリスとオランダはすでに存在していた商業的枠組のなかに入り込んでいったに過ぎず、十八世紀に至るまで彼らがグジャラートの政治や經濟に大きな影響を與えることはなかつた。インドとヨーロッパとの經濟發展について比較するならば、「十七世紀に入つてもヨーロッパ人は貧しい取引相手であつたし、まだ現地の人々に對して新しい取引手段や製造技術を教える能力はなかつた。當時はインドもヨーロッパも同じ程度的發展

段階にあったものようである」(八ページ、以下ページ数のみを記す)。

第一章 背景。この章ではグジャラートとアジア貿易との関係、およびグジャラートの経済における海上貿易の比重について觸れられている。著者が明かにしている興味深い論点としては次のような点が指摘できよう。(一)一五〇〇年ごろまでは東南アジアのマラッカが海上貿易上かなりはつきりした境界線をなしており、ジャンクがそこから西へ行くことも、イスラム教徒の船が中國にむけて航海することもなかった。(二)アジア地域内の貿易で主役を演じていたのは、かつてイギリス人史家W・H・モアランドが主張していたようなアラブ人ではなく、グジャラート人であった。(三)ヨーロッパとアジアとの香料貿易が強調されてきたが、十六世紀にアジアで生産された香料のうちでヨーロッパで消費されたものはそのごく一部に過ぎず、大半はアジア地域内で消費されていた。(四)グジャラート経済のなかで海上貿易が非常に大きな役割を果たしていた。(五)海上貿易に従事していたグジャラート人にはヒンドゥー教徒やイスラム教徒、ジャイナ教徒等の諸集團があったが、数の上でも壓倒的に多かったのがヒンドゥー商人カーストのヴァニアたちであり、また船の乗組員はイスラム教徒主體に構成されていた。

著者はこの章においてまた、ヨーロッパ人のアジア進出を次のような四段階に區分している。第一は對等の立場での貿易従事段階、第二は商館設置段階、第三は要塞建設段階、そして第四は領土征服段階である。十五世紀のアジア貿易はこの第一段階に相當し、つづいて國家的ないし準國家的方針に沿って第二段階に入り、多くの場合はその直後に第三段階に進む。第四段階は十八世紀後半にイギリ

スがインドの征服を始めることによって最初に到達した。

第二章 ポルトガル人。十六世紀に人口一五〇萬を越えたことのない小さな貧しい國ポルトガルがアジアに海上帝國を築くに至る過程において、一五〇九年のデウ沖の海戦での勝利が決定的な意味をもっていた。デウはカーティアワール半島のカンベイ灣入口に面した港町で、ポルトガルはこの沖合でのグジャラート・エジプト・カリカット三國連合艦隊との海戦に勝利したのである。以後一六〇〇年までの間に、ポルトガルはアフリカ東岸のソファラから中國のマカオに至る約五〇箇所の要塞や防禦區域を持つまでに至った。ポルトガルがその支配地域でとった對商人政策はグジャラートの支配者がとったそれとは際立った對照を見せていたが、それはポルトガルにとって關稅收入の占める割合が非常に高かった——ポルトガル領インディアの歳入の六〇パーセント以上、一方グジャラート王國にとつて關稅收入はその歳入の六パーセント程度——からである。

インド・ポルトガル間の貿易は、十六世紀で積載量五〇〇トン以下、十七世紀で二〇〇〇トン規模の大型船の船隊によつて行われ、毎年二月か三月にポルトガルを出帆、年末にゴアに到着し、翌年早々に歸國の途につくという、インド洋上のモンスーンを利用した形態が通常であった。C・R・ボクサーの研究によると毎年平均五隻半の船がポルトガルからインドに到着し、逆に三隻半の船が歸航の途につくという割合であったという。

ポルトガルのアジア貿易支配のうえで最も際立った特徴は通行證(カルタス)發給制度にあった。總督あるいはカピタンといったポルトガル人當局者によつて發行された通行證には、細かな記載條項

のほか禁止條件が附されており、通行證を所持しない船は拿捕され、戦利品として沒收されることになっていた。この通行證は外國航路のみならず、インド西海岸沿岸やグジャラート地方内での航行にも要求された。通行證發行の際の料金は僅かな額であったが、各船は發行地の要塞に保證金を積み立て、航行中ポルトガルのいづれかの要塞に立ち寄って關稅を支拂うことを義務づけられていた。

ポルトガルにとって通行證發給制度の最大の眼目は、この關稅の徵收にあった。というのはこの關稅收入がアジアにおけるポルトガル海上帝國の財政にとって不可欠であったからである。ゴアでの關稅率は一五六九年までは從價六パーセント、以後漸次引き上げられてその九〇年後には一〇パーセントとなった。他の稅關での關稅率もゴアの場合とはほぼ同様であった。時折現地の支配者に對して免稅カルタスの發給されることがあったが、これは多分に賄賂の性格をもっていた。

海上の船が通行證を所持しているかどうかを點檢し、加えて各地の支配者を威壓したり、海賊を警戒したりするために、ポルトガルはいくつかの艦隊を配置していた。それぞれの艦隊は紅海からカンベイまでかカンベイからコモリン岬まで、あるいはゴアの以北か以南というようにその定期的哨戒區域が定められていた。

ポルトガルのアジア貿易支配のもう一つの特徴はカフィラ制度、すなわち海のキャラヴァン隊の如く、ポルトガルの艦隊に護衛された小型商船の船團による航行制度を導入したことである。この制度は一五六〇年代に慣行化し、一五九六年以降義務づけられた。マラルの海賊の脅威に對抗するというのがその理由であった。カフィラの船團には二〇〇隻あるいはそれを越える小型船が加わることも

あった。

ポルトガルのアジアにおける貿易支配制度を機能させた三つの基本要素は、右のような通行證、艦隊、カフィラの各制度であった。これらの制度の効果はいかなるものであったか。なるほどこれらはいずれも嚴格に見えたが、しかしその効果は絶大というほどのことはなかった。制度そのものに缺陷があったからである。まず、ポルトガルはアデン港の占領に失敗したため、紅海を介したヨーロッパ向け貿易を封鎖できず、ポルトガルの貿易支配の體制に穴のあく形となっていた。第二にポルトガルは各地の傀儡支配者に依存せざるをえなかったが、彼らは必ずしもポルトガルの意向通りには動かなかった。第三にインド西海岸のチャウルとダマンに時宜に適した稅關を設置できなかったために、脫稅を十分にチェックできなかった。第四にポルトガル役人による權力の濫用や「汚職」が制度の有効なはたらきに障害をもたらした。そして第五に、ともかく關稅收入を重視するという考え方が支配的になり、彼らの貿易支配制度は當初の嚴格さを失っていくことになる。ポルトガルが獨占しようとした香料貿易が對ヨーロッパ貿易でもアジア地域内貿易でも十分な規制を加えることができなかった事實からしても、右の制度の効果がどの程度有効であったのかがうかがえる、と著者はいふ。

第三章 國家。グジャラートの支配者層をなす貴族とスルタンの權力の基盤は土地と人民、なかならず土地におかれていた。いわば領土第一主義であつて、それは身分や名譽の考え方にもよく表われていた。このために彼らは商業活動や海上貿易に積極的な支援を與えることがなかった。一方ポルトガルは國王の全面的な支援のもとに、スーラトとランデルへの進攻（一五三〇年）、パッセイン割讓

(一五三四年)、ディウの要塞建設着手(一五三五年)、ディウ島全體の統治權獲得(一五五四年)、ダマン割讓(一五五九年)というように、グジャラートにおける橋頭堡を次々と築いていった。このようなポルトガルの一連の行動に對して、グジャラートの支配者たちは一貫して斷固抵抗したり、ポルトガルを追い出すというような對抗措置をとらなかつた。それは十分可能であつたはずであるにもかかわらず、そうした措置をとらなかつたのは、グジャラートの支配者たちの考え方が海上貿易の重視におかれていながつたためである。この點が本書で著者の強調したい第一の要諦であるように見受ける。グジャラートがムガル朝に併合された後もこのような事態の改變は行なわれず、アクバルは免稅カルタスとの引き換えにポルトガルにグジャラートの海上貿易支配權を認めてしまつた。そして十七世紀の歴代ムガル朝皇帝も毎年一通の免稅カルタスを要求することに甘んじていた。

第四章 商人。一五〇九年ポルトガルが東南アジアのマラッカで貿易の許可をえようとしたとき、これに最も強硬に反對したのは、當時ここを據點にして東南アジア貿易を行なつていたグジャラート商人であつた。しかしポルトガルは二年後に武力でこの港を占領してしまふ。そして一五三〇年代になると、もはやいづこにおいてもグジャラート商人の反抗は事實上行われなくなり、ポルトガルの優位が決定的となつた。グジャラート商人は反抗よりもポルトガルの支配を受け入れ、そのもとの貿易活動の擴大の道を選んだ。ポルトガルにつづいてオランダ、イギリスも通行證を發給するようにになると、グジャラート商人は後者からもこれを取得してその海上貿易制度に従つた。

グジャラート貿易の繼續、發展はポルトガルの財政にとつても必要不可欠であつた。ここからグジャラート商人とポルトガルとの相互依存關係が形作られた。とはいつてもグジャラート商人はいろいろ知恵をめぐらして、王族、皇帝への免稅カルタス船を利用したりイギリス船やオランダ船に荷積したりする手口で關稅納付を忌避する方法を見出し、このためにポルトガルの關稅收入の減少を來した。

グジャラートから紅海向けの貿易は十六世紀を通じて大いに繁榮した。たとえばアクバルの免稅カルタス船の一隻は、一五八二年に一二〇萬ルピー相當の金銀を含む船荷を積んで紅海から歸港したという。一方グジャラートからマラッカ向けの貿易は衰退した。ポルトガルの占領以後、グジャラートにとつてマラッカの地位が低下したからである。グジャラート商人はマラッカに代つてスマトラ島のアチエーやジャワ島のバンタムに據點を移し、そのほかベンガル灣周邊にも貿易地域を擴大した。彼らはいままで以上に廣く分散した形で東南アジアや中國の品物の集荷、貿易を行なうようになるのである。

グジャラート商人はポルトガル領インディア、とりわけゴアとディウにおいて經濟面でのエリート集團を形成していた。彼らはポルトガルの支配を受け入れたばかりでなく、その貿易支配制度の機能に協力さえしていた。こうして兩者は持ちつ持たれつの關係にあつた裏面の事例がいくつか紹介されている。

第五章 商人と國家。グジャラートの商人たちは大きな都市において自分たちの歸屬する自治的組織をつくつていた。同一の商業活動に従事する人々の集團を代表する組織マハージャンが有名であ

る。このようなマハージャンには選挙で選ばれるか、時には世襲によつて引き継がれる指導者がおかれていた。商人集團は廣範圍にわたる自治権をもっており、彼らと國家との關係は必要な場合のみに限られていて、一般にうすかった。商人たちが支拂う關稅・内地通過稅・市場稅といった税金も、おもだった商人が集めて政府に納める形をとっていた。

自治権をもつ商人集團がポルトガルと協調したり貿易をつづけることに對して、國家は放任していた。商人たちも國家にポルトガルに對抗するための援助を求めたことは一度もなかった。國家と商人との間のこのような疎遠な關係があつたことが、ポルトガルの貿易支配制度の成立を許すことになる背景となつた點を著者ピアスは強調する。なおスーラトのシャールバンダルが港と稅關を取り仕切る役人であるとともに、アフマダバードのナガルシェートのような商人代表としての側面ももっていたと著者が指摘（二〇六、および三二一の注24）している點は注目される。

第六章 支配者と臣民。商人集團以外の他の社會集團も支配者とはほとんど關係なく自主的に行動していた。終章に當るこの章では、著者はこのような觀點から宗教集團、聖者集團、ザミーンダール集團、村内諸集團、都市の居住集團、外國人集團等々について紹介し、これらの諸集團がその内部では強い統合力をもっていたにもかかわらず、集團相互間の連帶は最小限度でしかなく、また上層の支配者集團との關係や接觸も深くはなかつたことを指摘する。

中世グジャラートは、人々が國家に對してよりも自分の歸屬する社會集團に對してはるかに強い親近感を抱く分散的社會であつた。このような分散的社會において、商人たちは國家から政治的介入を

受けることなく海上貿易を行なっていた。彼らはポルトガルの貿易支配制度に反抗するよりも受け入れる道を選び、一方グジャラートの支配者はポルトガルに對して效果的に對應しようとするれば可能であつたにもかかわらず、實際は強硬手段をとらず、ポルトガルがグジャラート商人の海上貿易を支配することに目をつぶっていた。右の點を再度強調して著者はこの章を結んでいる。

以上が序文から六章にわたる本文の特徵的な内容である。このあとに文獻解題が附されている。ここでは刊本から各種の寫本に至る多數のポルトガル語史料が紹介されているが、著者は「十六世紀のポルトガル語史料はアジア史にとつて非常に貴重なものでありながら、不思議なことに依然としてまったく無視されたままである。それらの中からかなりの數の文書が選び出されて刊行されていることは事實であるが、依然として未刊のままになっているものも數多い」（二六二）と述べて、豊富なポルトガル語史料の利用の課題を指摘している。また原書では脚注形式になつていた詳細な注記が譯書では卷末の後注として一括してまとめられており、それらは六〇頁を越える分量となっている。そして最末尾には索引と、それに譯書で新しく作られた文獻略號索引とが付されて讀者の便に供されている。

さて、ポルトガル人ヴァスコ・ダ・ガマとその一行が喜望峯を廻つてインドにはじめて到着した際、彼らをアフリカ東海岸からカリカットに案内したのがイスラム教徒の水先案内人であつたことはよく知られているが、それがグジャラート人であつたことは案外知られていない。インド洋上を東西に航行して幅廣い貿易活動に従事していたグジャラートの商人。彼らとその支配者がポルトガルの貿易

支配制度形成にどのように對應し、そこにどのような特徴が認められたかという點についての著者ピアソンの研究の主要な内容は右に紹介した通りである。この研究において、著者は從來未利用部分の多かったポルトガル語史料にはじめてインド史の側から本格的な接近を行ない、加えるに當時のベルシア語文獻や旅行記、イギリス東インド會社關係の諸記録等を活用し、また最近に至る研究成果を博搜、援用している。譯者生田氏の解説によると、本書はアメリカのインド史研究優秀圖書に贈られるワタムル賞を受賞したということであるが、宜なるかなというところである。著者による他の著書としては、解説にも紹介されている既發表論文集 *Coastal Western India, Studies from the Portuguese records* (New Delhi, 1981) や B. B. Kling との共編著 *The Age of Partnership, Europeans in Asia before dominion* (Honolulu, 1979) のほか、A. Das Gupta との共編著 *India and the Indian Ocean, 1500—1800* が目下準備中であるとの最近の知らせを受けている。まことに旺盛な仕事ぶりである。

本書を読んで最も氣になるところは、著者の中心的な主張點である支配者ないし國家と商人をはじめとするさまざまな社會集團との關係に關してであつて、この關係を著者はあまりに截然と切り離して論理構成しているのではないかと危懼を受ける。またグジャラートの關稅收入が全歲入に占めていた割合は低く「海上貿易の支配はグジャラートの政治體制を機能させるために本質的には必要ではなかった」(一四六)と著者はいうが、果して本當に關稅收入の割合は小さく、海上貿易はグジャラートの支配者にとってさほど重要ではなかったのだろうか。長島弘氏が「十六・十七世紀グジャラー

トにおける海上貿易と國家——M・N・ピアソン氏の所説をめぐつて」(『長崎縣立國際經濟大學論集』一八一、一九八四年)で批判しているように、疑問とするところである。著者は要するに、國家が商人の強力な後楯となつて海上貿易を積極的に支援したヨーロッパに見られたような重商主義が當時のインドにはなかったことを論證したい、としているように見受けける。そして著者は、インドの支配者が支配の基礎をあくまで土地と人民においていたことがその背景にあつたという。だが「ロマン的ゲルマン的封建制度に固有な土地の詩趣が、インドでもローマと同じようにほとんど見當らない。土地はインドではどこでもけつして高貴なものではない」というマルクスの言(『コヴァレフスキー・ノート』)は間違つているのであるか。

このほか小さな疑問點としては、支配者集團のなかに貴族などのほかカール・ハーナ(官營工房)で働く使用人や、宮廷の職人、歌手、藝術家等が含まれている(二二六、二三三)のは理解しがたし、またスーラトとアフマダバードの人口がアグラ、デリー、ラホールの人口五〇萬に劣らなかつたとしている(二三五)のも、確證がない。

譯文の方はよくこなれた滑かな文章で、非常に読みやすい。ポルトガル語關係文獻等については、原書が内容摘記的な間接引用の形にしているところでも、可能な限り原典からの直接譯出の勢がとられ、直接引用の形となつていところが各所にある。また原文にはポルトガルの國王とか副王とだけ記されている場合でも、それらの名前を特定して在位年數まで附記されているので、讀者は一層安心して正確に読み進んでいくことができる。このような箇所では、原

文と譯文の間に多少ズレが出てくるのは當然である。

ただ一、二氣の附いたところを指摘するならば、本書三九頁六一八行(原書二四頁一九—二二行)の「つまりここに擧げた數字は……」の文章は、「そういう數字ということになれば、關稅收入のほかに、輸出用の作物に課された地租收入やそれらの物資に課された内陸關稅を含むことになろう」とした方が適切であろう。一七六頁一行(原文一〇八頁二五行)と一七八頁一〇行(原文一一〇頁一六行)の「日本」はいずれも「中國」の間違いであろう。固有名詞の表記法については、こうでなければならないということであれば息苦しくなってしまうし、日本語の母音の特徴やその美しさという点からしても長音符(音引)はできれば少い方がよいと私も思っているが、ムガル、スーラト、アウラングゼーブなどは次第に定着してきた表記と見てよいのではないだろうか。またスーラトやディウの「總督」(Governor)の譯語は「知事」の方がしっくりとするのではないだろうか。ムガル時代、各州に皇帝の權限を代行する總督(subadar)が赴任しており、これと混同する虞なしとしないからである。しかしこれらはあくまで枝葉のことであって、名譯としての本書の價値を低めるものでは決してない。

私は以前の拙文「ムガル朝インドの商品流通」(『中世史講座』3、一九八二年)においてピアスンの本書に觸れ、十七世紀のヨーロッパ諸國とインドとがほぼ同一の發展レベルにあったとする冒頭部で引用した彼のことばを紹介したことがある。確かにピアスンの研究は従前のたとえばW・H・モアランドなどの研究とは違った新鮮な觀點を多く打ち出している。問題提起に富んだ彼の代表作である本書が、このたび生田氏の優れた譯でわが國讀書界に紹介され、研究

の便に供せられたことを心から喜ぶものである。

一九八四年一〇月 東京 岩波書店 岩波現代選書九八

B6版 三七六頁 二二〇〇圓